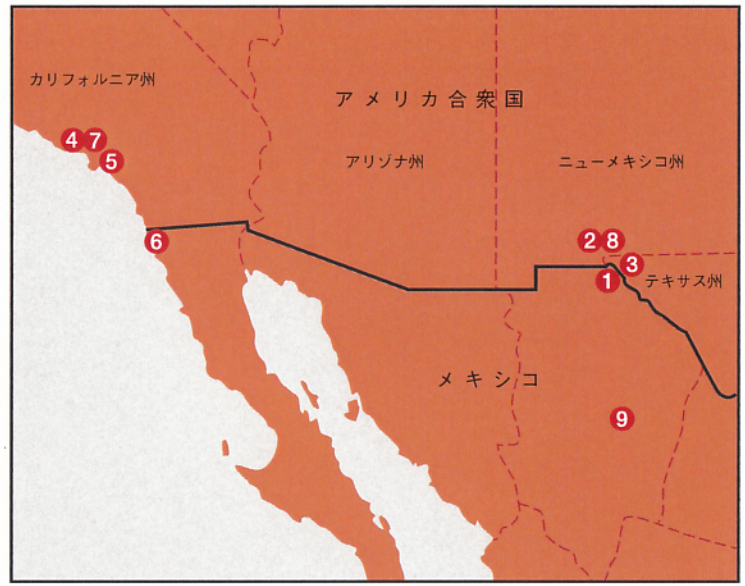
この圧倒的スピード感。
―大森 望さん



①シウダーフアレス
目の前にビリャの首がドサっ。

②ラシメーヤ
ヘクターのマイホームに
イェール大生が次々と乱入。

③エルパソ
カウボーイ風の共和党員（？）に
銃を突きつけられる。

④ヴェニス
オーソン・ウェルズの撮影現場。
マレーネ・ディートリッヒに
ヘミングウェイとの関係を
たしなめられる。
“肉食獣”フィエロの手下に
銃撃される。

⑤ロサンゼルス
S＆Bトリオに遭遇。
フィエロに銃撃される。
プレスコット・ブッシュと話す。
ビリャの頭蓋骨から
地図（？）を取り出す。
FBIに呼び止められる。
元傭兵ホルムダールに
事の全容を聞きだす。

⑥ティファナ郊外
フィエロに誘拐された
バドを助ける。
フィエロを仕留める。

⑦ヴェニス
オーソン・ウェルズと
決着をつける。

⑧ラシメーヤ
ビリャの本物の首を回収

⑨チワワシティ
さて、首の行方はいかに？

パンチョ・ビリャの首はどこへ行く？

この物語は、1926年に墓の盗掘にあって以来、行方不明となっていたパンチョ・ビリャの首が、主人公ヘクターの前に置かれるところから始まる。一気に火を噴く、首を巡る争奪戦。ヘクターは、新米詩人バドとエキストラ女優アリシアをお供に、首を然るべき相手に届けようとするのだが……。ロードムービーさながらの、ヘクターと首の軌跡を見てみよう。

先に小説を読むか？解説を読むか？

本書には著者が愛して病まない映画や文学作品のトリビアが満載。「文学ファンと映画ファンなら、節々で一言コメントしたくなるようなニヤリと楽しめる小説。一読をお薦めしたい」と、池上冬樹氏が本作巻末の濃厚な〈解説〉でそれらを一部、フォローをしてくれている。先に小説を読んで「あの場面はこういうことだったのか」と頷くもよし、〈解説〉を読んでから小説をより深く噛みしめるのもよし。

不気味に追いかけてくる秘密結社、S&B（スカル・アンド・ボーンズ）

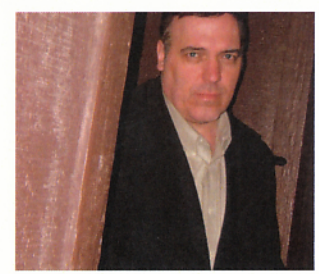
スパイスなどの食品会社ではありません。イェール大学の秘密結社（といっても、メンバー名が公表されている）スカル&ボーンズ。アメリカ財界やCIA、フリーメイソンなどとも深いつながりがあるとされている。本書にも出てくるが、アメリカ前大統領のジョージ・W・ブッシュや祖父のプレスコット・ブッシュもそのメンバー。アパッチ族の指導者ジェロニモの墓から遺骨を持ち去ってS＆B本部に飾ったという悪しき噂もあるくらいだから、ビリャの首を欲しがることだって大いにあり得る。

英雄？ 犯罪者？ パンチョ・ビリャの一生

本書では、カメオ出演ならぬ“しゃれこうべ出演”のパンチョ・ビリャ。この男は一般に「メキシコ大衆の英雄で、アメリカの敵」とされている。ざっと彼の一生を見てみよう（もちろんパンチョ・ビリャを知らなくても小説は楽しめます）。

1878年	誕生。6歳で山賊の仲間入り
1911年	メキシコ大統領ディアスの独裁政権と戦う
1912年	独裁政権側のウエルタ将軍の命で逮捕されるが脱獄
1913年	ウエルタに対抗する革命軍に加わる
1915年	国軍の支持を得るオブレゴンと激突、大敗
1916年	旧体制を支持するカランサが大統領に就任。それを承認したアメリカに抗議し、暴れる。アメリカはビリャ懲罰部隊を派遣するが翌年、遠征は失敗。
1920年	和平協定にてビリャは武装解除。農園主として平和に暮らす
1923年	暗殺される

愛すべき、映画や犯罪オタクか!? クレイグ・マクドナルド



【著者紹介】 Craig McDonald
クライム・フィクションをこよなく愛する、アメリカのジャーナリスト、エディター、小説家。彼の短編作品は度々、文芸雑誌やアンソロジー、クライム・フィクションのウェブサイトなどにお目見えしている。07年に本作（原題HEAD GAMES）で長編小説デビュー。08年のエドガー賞、アンソニー賞、ガムシュー賞などにノミネートされている。ヘクター・ラシターのシリーズを4作刊行。シリーズ外の小説『EL GAVILAN』も発表。
またノンフィクションにも定評があり、特に彼のライフワークとも言えるクライム・ライターやミステリー作家へのインタビューをまとめた『ART IN THE BLOOD』も好評。

●充実のHPは www.craigmcdonaldbooks.com

何とも颯爽とした作品ではないか。
―池上冬樹さん

S＆Bのマーク